

<書評>

宮本孝二著 『ギデنزの社会理論

——その全体像と可能性——』

(八千代出版 1998年)

沼 田 健 哉

宮本孝二氏は、桃山学院大学において、社会学原論と現代社会論の講義を担当している社会学者であり、アンソニー・ギデنزの日本における代表的な研究者の一人である。宮本孝二氏は、1980年1月に提出した修士論文「階級理論の新展開」以来、ギデنزの主要著作の紹介と検討を行い、それをもとに、社会学原論や現代社会論の展開に生かす方法を研究し続けてきた。宮本孝二氏は、本書をその中間総括として位置づけているが、現段階においても注目すべきものといえよう。なお、本書の目次は、以下のような各章節から構成されている。

序章 ギデنز社会理論の全体像を求めて

はじめに

第一節 ギデنزの著作とギデنز論

第二節 社会学原論の構成と焦点

第三節 現代社会論の構成と焦点

おわりに

第一章 ギデنز社会理論の中心問題

はじめに

第一節 階級構造化の理論枠組み

第二節 構造化理論の提唱

第三節 モダニティの社会理論とパワー問題

おわりに

第二章 社会変動と国家パワー

はじめに

第一節 唯物史観のパワー論的批評

第二節 国家パワーの歴史と現在

第三節 政治的パワーと経済的パワー

おわりに

第三章 マクロ社会理論の展開の基本方向

はじめに

第一節 社会理論の課題

第二節 行為と構造

第三節 歴史と運動

おわりに

第四章 ライフ・ポリティックスとモダニティ論

はじめに

第一節 ライフ・ポリティックスとその背景

第二節 ギデンズのモダニティ論の展開と全体像

第三節 親密関係の社会理論

おわりに

第五章 ラディカル・ポリティックスの時代

はじめに

第一節 ラディカル・ポリティックスとは何か

第二節 新しい社会の構想

第三節 ギデンズ社会理論における位置づけ

おわりに

第六章 ギデンズ社会理論の可能性(一) 社会学原論

はじめに

第一節 構造化理論の総括

第二節 相互行為とパワー

第三節 場と全体

おわりに

第七章 ギデンズ社会理論の可能性(二)

はじめに

第一節 モダニティとパワー

第二節 アイデンティティ論と全体的構成

第三節 トренд論の要点

おわりに

以上のような各章節からなる本書は、大阪大学大学院人間科学研究科に宮本孝二氏が提出した博士論文であり、修士論文の頃からの階級というテーマによって、マルクス以来の社会理論を総括しようという試みとも関連している。宮本孝二氏は、一般理論としての構造化理論と、階級論を基軸とした現代社会論とを、統一的・総合的に把握できるのではないかという着想を原点として、本書を執筆するに至っている。

この着想は、宮本孝二氏が、社会学原論と現代社会学の講義を担当していることにも対応しており、宮本孝二氏の問題意識ならびに論理の一貫性の顕れともいえよう。しかし、その反面、ギデンズの壮大な社会学の体系を、限定した視点から分析しているとの感がしないでもない。

それでも、宮本孝二氏は、このことを自覚しており、ギデンズ社会理論の内容の豊かさは、本書とは異なる全体像のまとめ方をも可能にしていることを指摘している。ところで、アンソニー・ギデンズは、現代イギリスを代表する社会学者で、その多くの著作により、世界的に知られている社会学者であり、評者も種々の点で学ぶことの多い研究者である。

本書は、ギデンズの著書を的確に要約しており、かつそれに加えて、ギデ

ンズの解釈においても一定のオリジナリティを有しているといえよう。一般に、ギデンズの理論構築において最も注目すべきものの一つとして、構造化理論があげられるが、宮本孝二氏は、前記の如く、ギデンズ社会理論の中心問題に関する考察において、構造化理論の提唱を重視しつつ分析を加えているのは的確といえよう。

全体として、本書は、限定した視点から、かなりバランスよく、ギデンズの社会理論の全体像を把握し提示することに成功しているといえてよいが、ギデンズの理論の問題点の指摘は、いま一步の感がする。しかし、それも、宮本孝二氏が将来性に富む研究者であることから、今後に期待してよいものと思われる。

およそ、ギデンズのような大家の著作は、研究者によって、多様な解釈が可能であり、唯一の正当な解釈があるわけではない。さらに、いかなる点に注目するかによっても、多くの研究が生じてくる。評者は、宮本孝二氏の考察の中でも、ギデンズの環境問題に関する部分は、優れているとみなしており、ギデンズの見解の意義と限界を的確に指摘している点は評価すべきものといえる。

以上のように、宮本孝二氏は、社会学の主要な理論をバランスよく学びつつ、手固い理論構築を試みる研究者であり、その一端は、森下伸也・君塚大学・宮本孝二著『パラドックスの社会学 [パワーアップ版]』（新曜社、1998年）によっても、うかがい知ることができる。

ただ、おしむらくは他の日本の多くの社会科学者と同様に、真の意味での創造性において若干欠けているのではないかとの印象を与えがちである。しかし、それも本書が、宮本孝二氏にとって一応の中間総括であることから、今後より独創的な理論構築を行いうる可能性を秘めている。

いずれにしろ、本書は、ギデンズの社会理論、さらには、現代社会学を学ぶ者にとって、必須といえてよい好著であり、評者も本書から多くの示唆を受けた。以下、単なる本書の書評に終わることなく、日本の社会科学者が欧

米の超一流の研究に比較すると、理論研究においてオリジナリティ豊かな研究が少ない要因に関して、若干の考察をすることにしたい。

ギデンズの理論研究は、世界的にみても一流のレベルにあるとみなされているが、宗教に関する論述に顕著にみられるように、若干の問題点が散在しているといえる。しかし、ギデンズが執筆した、テキストブック『社会学』（而立書房1992年）のような著書の内容を、単独でカバーできるような力量を有する研究者を、日本人の中に見出すのは困難といえる。その博識とグローバルな視野の広さには、驚くべきものがある。さらに、その内容が理論の構築に明確に用いられていることが察知されるのである。

これに対して、日本の研究者は、実証的研究の成果が、世界的レベルのオリジナルな理論構築に生かされているケースが少ないといわれている。

このような日本の実情をかんがみつつ、宮本孝二氏や我々日本の研究者が今後より卓越した研究者となるための前提条件をあげると、まず日本を中心とした現代社会の実証的研究を可能なかぎり行うことが適切と思われる。さらに、宮本孝二氏の博士論文の主査を行われた厚東洋輔氏の名著『社会認識と想像力』（ハーベスト社1991年）において詳細に述べられているように、社会学の発生期以来現在にいたるまで継続している、文化的、社会的、歴史的制約性を的確に認識することが、有意義な結果をもたらすといえよう。

本書は、日本の社会学者が、いかにして、世界の社会科学に貢献できるようなオリジナルな研究を行うことができるかという問題に関して、いくつかの示唆を与えた点においても、きわめて意義のある著書といえることができる。評者も、本書に学びつつ、理論的、実証的研究においてよりオリジナルな研究ができるよう、ともに努力する意欲をかきたてられたというのが、読後の実感である。そのことを、宮本孝二氏に感謝しつつ、このつたない書評を終えさせていただくことにする。